

大宮盆栽村の歴史

盆栽は何世紀もの歴史のある芸術形式ですが、日本では 20 世紀に入ってから徐々に人気を博してきました。首都東京の盆栽の職人たちは、狭く過密な利用可能であったよりも大きな土地を求めたのです。東京は急速な工業化とそれに伴って蔓延した公害によって、繊細な「生ける芸術」に親しむには徐々に不適な環境となっていました。

埼玉県にある都市・大宮は東京の北 30km に位置しており、1885 年の大宮公園の開園によってポピュラーな娯楽スポットとなりました。東京の第一線の盆栽家たちの共同体は、盆栽園による村のような群落を置くには、大宮郊外の土呂が申し分ない場所だろうということに合意しました。その当時、急速に成長する首都よりも、澄んだ空気と良質な地下水を持つ大宮の環境条件は好ましいものでした。大宮が推されたもうひとつの要因としては、土壌です。遠い過去にあった富士山の噴火による堆積物が、この地域のミネラルの少ない赤土の土壌の一因となっていたのです。そこに植わったいかなる植生も健康に育っており、自然の矮小化に主眼を置いたこの芸術形式のために使われる土を少なくすることを可能にしました。

1923 年の関東大震災による広範な火災や破壊のあと、多くの盆栽家たちはますます首都からの脱出に躍起となり、1925 年に大宮盆栽村が今日の場所に設けられました。以前は十分に活用されていなかった土地が、盆栽栽培の活発な中心地となり、第二次世界大戦に至るまでのあいだに 35 もの盆栽園に場所を提供していました。大宮盆栽村の重要性は自治体にも認められ、1942 年には公式にその地区が「盆栽町」と名付けられました。

しかしながら戦争の勃発によって、盆栽文化は一時的に衰退しました。政府による反ゼイタク運動は盆栽を道楽と見なし、多くの盆栽家が徴兵されました。大宮盆栽村の盆栽園のほとんどが閉鎖を強いられました。残った数人の勇敢な盆栽栽培者は、1945 年の戦争終結に至るまで秘密裏に栽培を続けていました。

1980 年代末の「バブル経済」でピークに達した経済大国としての日本の戦後復興は、大宮盆栽村や盆栽そのものの上昇機運と並行していました。大宮の盆栽家たちは祭りやその他の手段を通じて盆栽の振興のために尽くし、そして盆栽は富裕な政治家やビジネスマンの誰もが欲しがる所有物になりました。国際的な舞台での日本の重要度が増すにつれ、盆栽は国際的に知られるようになり、この国の象徴にまでなりました。

今日では、経済の急成長は終わり、盆栽はニッチな娯楽となっています。しかし、これらの移りゆく時代を通じ、そして 21 世紀に至っても、大宮盆栽村は盆栽という芸術を、活気にあふれ国際的に認められるものに保ちつづけています。